

新田 章 博士 (文学) 学位請求論文審査報告書
論文題目：日本仏教における因果応報の研究

本論文は、仏教の基本教理として是認される因果応報について、「仏教とは本来、この因果応報・業報輪廻そのものの「解脱」を、つまりは「成仏」(ブツダ・覚者に成ること)を示す道であり、それは道德性の次元を超越した宗教性の次元に立つ教えであるから、仏教本来の救済は衆生を道德的な善へではなく、宗教的な善としての成仏へこそ導くべきものである。とすれば、因果の超脱としての成仏という契機を欠いた単なる因果思想の流布は仏教道德の浸透とは言えても、結局は仏教の世俗化にすぎない」という観点に立ち、「近世仏教の民衆教化は、確かに「因果応報」を「倫理・道德」として説くことに主眼が置かれていた。だが、民衆はその底意を見抜いていたのである。仏教の民衆化とは仏教による民衆の愚民意識の産物でもあったのである。それでは「宗教」としての仏教とは何であるのか。究極の問題はそれであろう。私が本稿で「因果」という問題を考える場合、宗教哲学的立場に立つ所以である。」として、宗教哲学の観点から論究しようとするものである。

日本人が因果をどのように理解したかを追いかけて、どのような理解が相応しいのかを明らかにしようと試みた論文である。結果として、因果応報を、古代の聖徳太子に始まり、平安時代からの浄土教に触れ、その中心を、中世の時代の仏教者の理解に置き、近世には若干、後退した理解がなされたとする。なかでも重要な位置を占めると考えたのは道元と日蓮であった。道元における「因果不落」「因果不昧」の理解は、最終的にはその両者を受け入れて「因果を超脱する」と「因果同時」を認めることにあったとする。日蓮の場合には「因果各別」と「因果同時」の双方を認める立場にあったとする。そして、結局は、因果超脱、さらには双方を認める立場も、ともに仏教の縁起、空思想に裏付けられたものであると理解するのである。

第1章神と仏では、「日本仏教」という概念、日本人の神観念と他界観、神仏関係の変遷、祖先神と崇り神、日本人の神仏信仰の有り方という観点から論述し、「仏教が古来のタマの観念を結局は仏教化できなかったということ、タマは相変わらずホトケという名のタマにすぎないということである。成仏したはずのタマが定期的に帰ってきて、僧侶や家族の供養を受けて再びあの世に帰ってゆく。仏教儀礼の対象はホトケと呼ばれてはいるが、その実体はあの世とこの世を往来するタマに他ならない。建前では解

脱を説きながらも僧侶が現実演じている役割は、タマ・ホトケの死後の運命の保証にすぎない。このように日本人は、若干の例外を除いて、民衆も僧侶でさえも仏陀の教えを根本的には受容することなく、自らが仏陀（＝覚者）と成ることを関心の埒外に置いてきた。仏教伝来時から今日まで、仏と言えば仏陀ではなく、仏像という超自然的な力を具えた人工建造物であり、ホトケと呼ばれる死者のタマにすぎない」とする。

第2章日本仏教の展開では、聖徳太子の仏教理解、奈良仏教、平安仏教（最澄、空海、安然、天台本覚思想）、【補説】言霊信仰と本覚思想、鎌倉仏教、浄土教の展開（源信、法然、法然の弟子たち、特に証空と西山派、親鸞と一遍、道元、日蓮について論述する。その結果、「国家であれ民族であれ宗教であれ、差異を一切排除した絶対的同一性の定立はエゴイズムを助長するにすぎず、万民の救済を帰結しないのである。救済とは差異の許容である。自宗の同一性・純粋性をいかにして維持するかではなく、その宗旨がどの点で仏説か、仏説とは何か、更に敷衍して言えば、既成の諸宗教の核心が何かではなく、宗教の宗教性の核心とは何かを各人の生存に即して探求すべきである。この問題の究明こそが私を本稿執筆へと駆り立てている唯一のパトスだと言っても過言ではない」として、宗教としてあるべき姿を提唱している。

第3章近世思想と因果応報では、中世後期から近世へ、近世初期と因果物語、『因果物語』、江戸初期という時代、因果物語』と仏教説話の運命、仏教の民衆教化と因果応報、儒教・国学・神道、近世日本の宗教・思想の状況、近世初期の神道、鬼神論と儒教的因果応報、国学の他界観と因果観、国学から神道へ、排仏論と護法論の論点、近世の排仏論、近世の護法論、護法論の問題から論じている。

これらの考察を通して、「結論」として「病気であれ何であれ、「神も仏もあるものか」という痛切な苦難に直面している者、行為の善悪と幸不幸とのズレに苦悩している者、宗教に絶望している者にして初めて「宗教」と真摯に向かい合うことができる。宗教は非日常性をどう生きるかという問題に唯一関わる営みだからである。しかも人生を含めて一切は「無常」であり、「生老病死」の「苦」（自我の計らいではどうにもならないこと、つまり無我）は人間の宿命であり、決して逃れることができない。病気は罹らないに越したことはない。罹ったら速やかに治るに越したことはない。だが、必ずしもそうはいかない。良い医者、良い病院に出逢えない焦りや

苦しみは、八方手を尽して出逢えることもあるだけに、それはよく理解できる。だが、それに奔走するあまり、人生の時間と労力を無駄にするとしたら、極めて愚かなことではないか。短命より長命に越したことはない。だが長命ゆえの苦しみもある。これらにおいて我々に必要なのは因果超脱の生き方である。これを教えてくれるのは科学でも医学でも呪術宗教でもなく、いわゆる普遍宗教、佐々木の言う「超越的な宗教」であるべきなのだが、我々の眼が曇っているのか、普遍宗教の努力が足りないのか、今や世俗化によって宗教は死に体である。大宗教、特に仏教の教義が示す極めて超越的、哲学的、普遍的な世界の復権が求められる所以である」として、筆者独自の見解を披瀝している。

時に利用されている先行研究が時代遅れになっている感を否めず、またそれが研究書ではなく一般的な啓蒙書であることが多い点はまず気になる点である。特に最初の第一章はその傾向が強い。死後の世界観は一九八〇年代に神野志隆光によって、地下世界ではなく上方にあったことが指摘され大きな転換がなされたが、筆者は知らないままで論述している。日本の死後の戒名の起源についても、臨終出家、死後出家など、歴史学や国文学の成果が生かされていない。さらには論述にも、資料を用いて論証するという姿勢が、第一章にはあまり感じられない。第二章は本論の中心で、対象とする資料を引用しながら論証しようとする姿勢が感じられるので、多少良くなっているように思われるが、それでも基本的には資料を如何に理解するのかに費やされている。

とはいえ、第二章の浄土宗、曹洞宗、日蓮宗の箇所は、興味深く拝読した。それぞれの宗のエッセンスを、哲学的に述べている点は好感が持てた。

しかしながら、幾つか疑問も感じざるを得ない。たとえば道元の「修証一等」は良く記述できているが、「身心脱落」はどのように理解したのだろうか。この部分は若干触れるのみで、見通しも示されていなかった。

最後に、本論のタイトルが「因果応報の研究」であったが、実際には論述が多岐にわたり、本人の知識の博搜ぶりはとてもよく分かったのであるが、テーマに即した書き方からは若干遠いと言わざるを得ないのではないだろうか。正直に言えば、新田流の日本仏教史の近世までの概説書というような感じであり、若干、因果応報の研究というには的外れのような気がしないでもない。

資料の博搜と該博な知識には敬服に値するものがある。日本仏教史の中において、通史的な観点から一つのテーマを論じようとしたその意欲を思えば、問題は多くあると言わざるを得ないが、これは広範囲にわたって哲学的に考究するという研究立場の相違であり、決して本論文の価値を下げるものではない。

非常に哲学的であり、格調の高い識見を有しており、すでにその主張は既刊の『サンサーラ』第1巻、第2巻にも窺える非常に範囲の広い論文であり、旧制の学位に相当する内容である。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成28年1月28日に公聴口頭試問をおこない、筆者の研究の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断し認定する。

平成28年1月28日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 三友 健容
副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 庵谷 行亨
副査 東京大学大学院人文社会系研究科
インド文学インド哲学仏教学専門課程
教授 蓑輪 顕量